

豊浦寺の調査

—第133-9次

1 調査の経過

県史跡豊浦寺跡の現状変更（向原寺納骨堂建設）に伴う事前の発掘調査。向原寺の現境内は、7世紀第2四半期の建立と推定される豊浦寺講堂の推定地にあたり、今回の調査区の南東で実施した1980年の奈文研第2次調査では、中世の仏堂（SB480）および創建期の講堂（SB400）の基壇版築土を確認している（『藤原概報11』）。また、南方の庫裏の改築に伴う1985年の奈文研第3次調査では、講堂南辺の雨落溝（SD405）や基壇版築土のほか、その下層から、周囲に石敷とバラス敷をめぐらす総柱の掘立柱建物（SB450）を検出している（『藤原概報16』）。

『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』や『日本三代実録』元慶6年（882）8月23日条所引の仁寿4年（854）9月13日「太政官符」には、推古天皇の豊浦宮を寺として、豊浦寺と名づけたと見える。したがって、豊浦寺の創建期を遡る上記の掘立柱建物は、豊浦宮の一部である可能性が高いだろう。この建物の廃絶から講堂創建までの間に堆積した土層から、飛鳥Ⅰ段階の土器が出土している事実もそれを裏づける。また、講堂の基壇築成に先行する土坑（SK440）からは、飛鳥寺と同範の軒瓦が集中して出土し、金堂の創建瓦と推定されている。

今回の調査区は、講堂基壇の推定北辺に近い位置にあたり、従来不明であった講堂の南北規模の把握とともに、下層の豊浦宮にかかわる遺構の確認が期待された。

そこで、南北4.4m×東西3.0m（13㎡）の調査区を設定し、すべて人力による発掘調査をおこなった。

発掘調査は10月12日に開始し、同日、奈良文化財研究所が設置した3級基準点を固定局とするGPS測量（測地成果2000に基づく世界測地系）と水準測量を実施した。以後、地表下約60cmまでは全体を掘り下げたが、近世以降の置き土が厚く堆積するため、土置き場との関係で、14日からは東端部のみ60cm幅で深掘りすることとし、基壇版築土とその下位に位置するバラス敷を検出した。15日に写真撮影および平面図・土層図の作成をおこなう。あわせて、奈文研第2次調査の礎石と、現在露出展示されている同第3次調査の敷石の標高を再測する。その後、23日に地元を対象とした調査成果の説明会をひらき、25日より埋め戻しを開始。27日に完了した。

2 調査の成果

土層 地表下約50～60cmで比較的堅い置き土の面となり、この面までは全体を掘り下げた。この置き土は厚さ60cmほどあり、その下は、近世の瓦や陶磁器を含む青灰色～暗灰色粘質土が40cm以上の厚さで堆積している。調査区が狭小なため確定できないが、窪地か土坑状遺構に

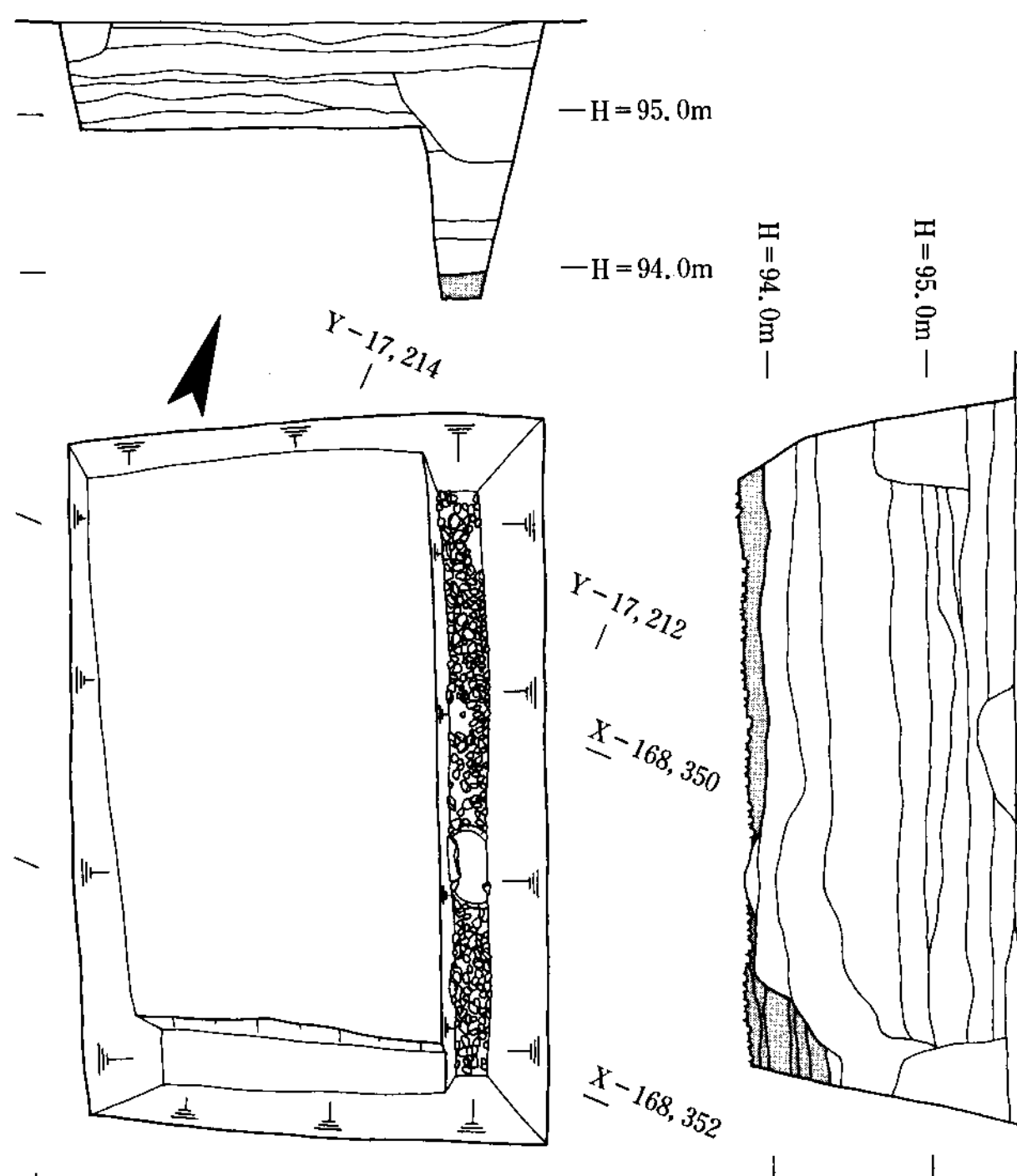


図99 第133-9次調査遺構図（網目は版築土） 1:80

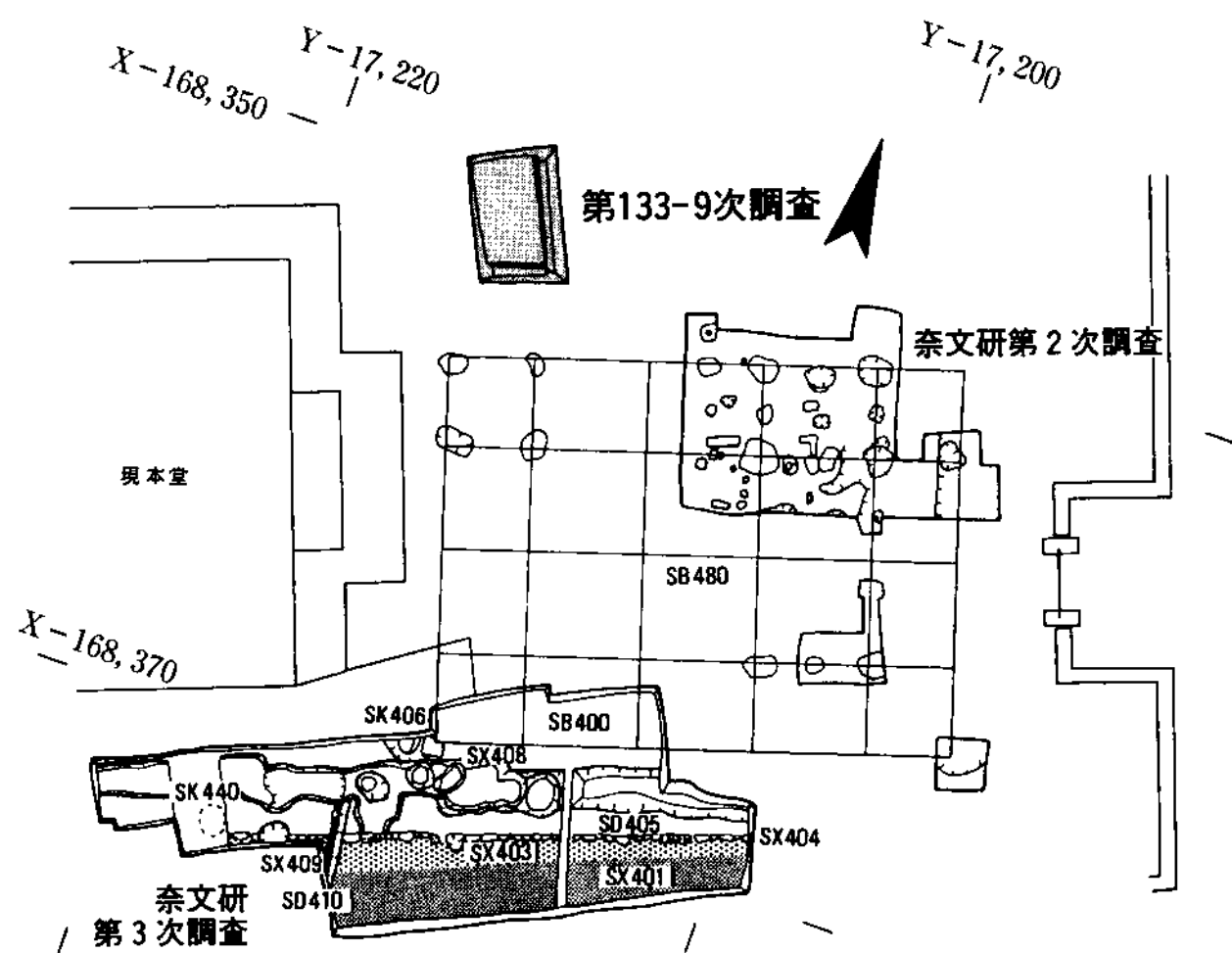


図98 第133-9次調査位置図 1:500

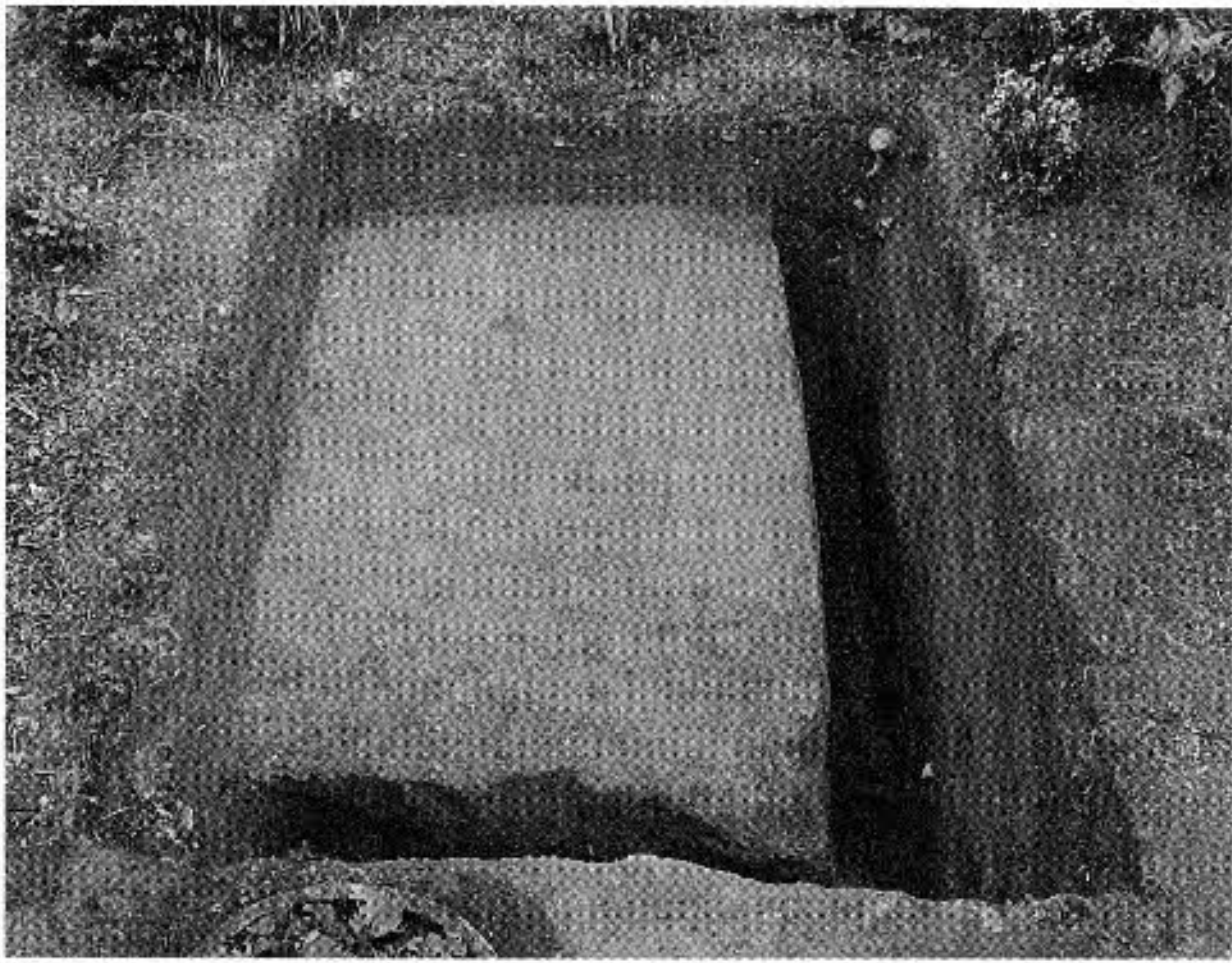


図100 第133- 9 次調査区全景（南から）

おける自然堆積であろう。この下が講堂の基壇版築土となり、もっとも遺存状況のよい部分では、厚さ約50cmの版築層が残存している。また、版築土の下にはバラス敷が広がるが、両者のあいだに間層は認められなかった。バラス敷上面の標高は93.8～93.9mで、現地表面からは約1.7mの深さがある。

遺 構 講堂の基壇版築土とバラス敷のほか、前者を掘り込む浅い窪み、近世以降の土坑や溝などを検出した。以下、古代の遺構について略述する。

講堂の基壇版築土は、調査区東南端部分で約50cmの厚さがある。橙灰色粘質土と淡灰褐色～灰褐色砂質土（一部に灰黒色粘質土）を突き固めており、きわめて堅い。もっとも、一定の高さをもつ基壇として確実に認められるのはこの部分だけで、それより北では、バラス敷の直上に橙灰色粘質土が1層遺存するにすぎないが、この橙灰色粘質土層は調査区の北端まで達し、バラス敷を完全に覆っている。したがって、これを一連の版築土とみてよいとすれば、本来の基壇は今回の調査区全域におよび、基壇北辺はさらに北に位置していたことになる。

なお、奈文研第3次調査では、講堂基壇南辺の雨落溝（SD405）および基壇外装の抜取溝とみられる遺構を検出している。後者の北縁から今回の調査区の北端までは約20m（南縁からは約21m）、基壇として間違いない版築層の高まりまでは約17mの距離がある。したがって、豊浦寺講堂の基壇南北長は17mを下回ることはなく、20mないしそれ以上となる可能性が高い。

ちなみに、飛鳥時代の講堂で南北長が判明する例としては、飛鳥寺が22.9m、山田寺は18.9mという数値が得

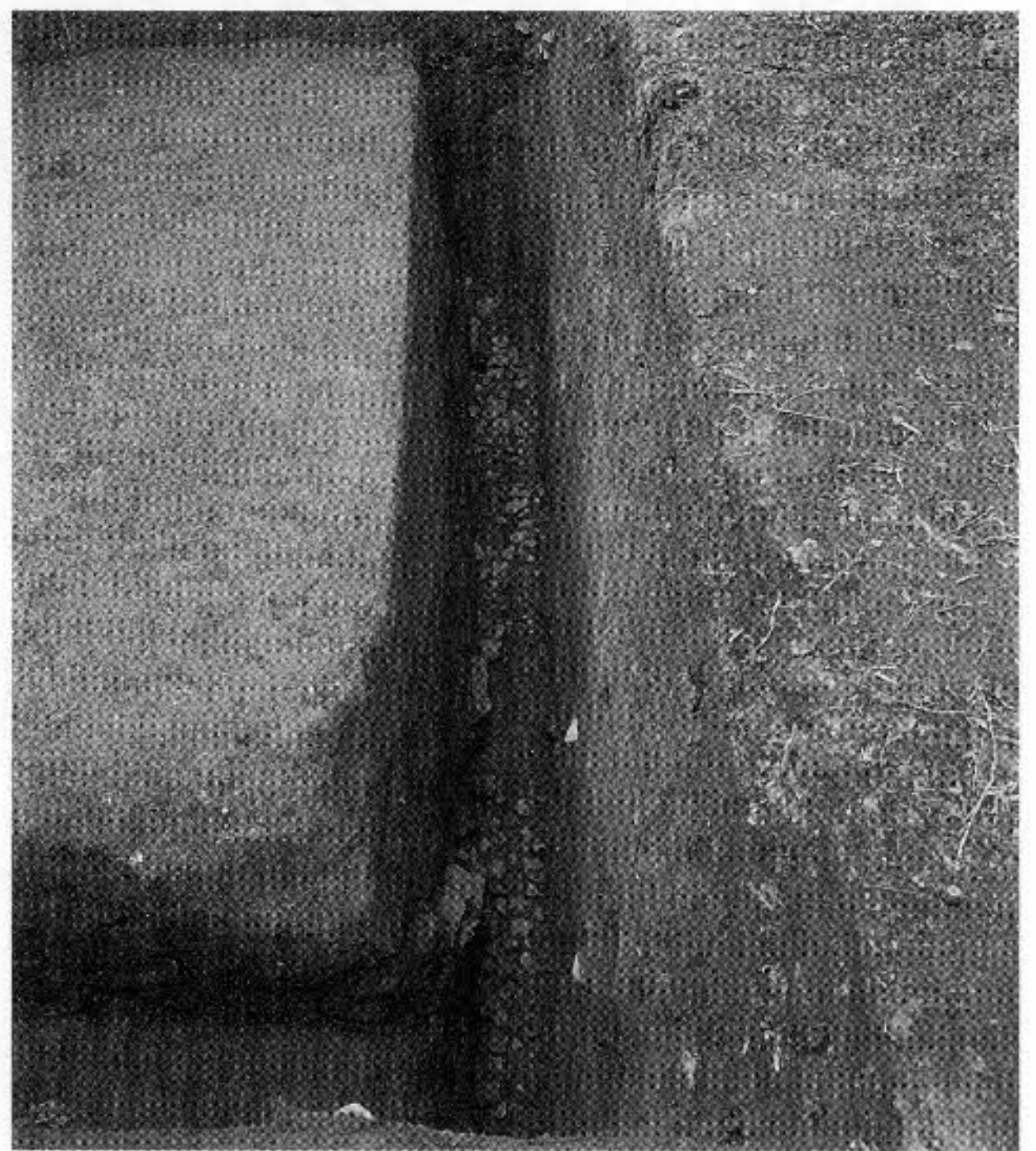


図101 検出したバラス敷（南から）

られている（奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』1958年、同『山田寺発掘調査報告』2002年）。したがって、豊浦寺の講堂は山田寺をしのぎ、飛鳥寺に近いが、少なくとも両者の中間程度の規模を備えていたと推定される。

今回検出した基壇版築土の下に広がるバラス敷は、径3～8cm内外の礫を敷きならべたもので、奈文研第3次調査で確認した掘立柱建物周囲のバラス敷と形状がよく似ている。また、両者の標高を比べると、今回の調査区のバラス敷上面のほうが約30cm低いですが、これはむしろ、北へ傾斜する地形に整合するものといえる。

このバラス敷の性格については、調査範囲がごく限られていることもあって確定できないが、第3次調査と一連のものとみるには間隔が過大であり、別の掘立柱建物の周囲をめぐるバラス敷と考えてよいだろう。

ともあれ、層位的な関係とあわせて、これらが豊浦宮の一部であることはほぼ確実であり、豊浦寺の下層に、豊浦宮の遺構が良好な状態で広がっていることをあらためて確認した意義は大きい。

遺 物 丸瓦60点（10.2kg）、平瓦194点（45.6kg）のほか、土師器・須恵器・陶磁器などの土器類が出土した。大半が近世の遺物で、古代に遡るものは僅少である。講堂基壇の版築土中からも土師器と須恵器の細片が出土しているが、量的にはごく少ない。（小澤 毅）